

令和 6 年 10 月 18 日現在

機関番号：44412

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10758

研究課題名（和文）看護職のセカンドステージへの移行を支援するキャリア発達教育の有効性

研究課題名（英文）effectiveness of career development education to support nurses' transition to the second stage of nursing careers

研究代表者

齋藤 洋子（Saito, Yoko）

大阪信愛学院短期大学・生命環境総合研究所・研究員

研究者番号：80738592

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：在宅看取りを長年継続している60代以降の訪問看護師7名にインタビューを行い、訪問看護で在宅看取りにかかわるに至った経過や在宅看取りの実践、ケアについて経験を語ってもらった。まず、セカンドステージにある訪問看護師が在宅看取りのケアをどのように実践・継続しているか、継続する理由、行っているケア、継続を支えているものはなにかを明らかにするために、語りを質的現象学的に分析し、訪問看護師個々のリアルな経験の構造を明らかにする。現段階で研究成果について学会報告や学術論文作成には至っていないため、今後報告、発表する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子高齢社会、人口減少社会への対応として地域包括ケアが推し進められている中、生涯現役時代の雇用改革として65歳以上の継続雇用年齢の引き上げなど、働き方改革に向けた取り組みが推し進められている。在宅看取りのケアの充実のために、長年生きがいを持ち、在宅看取りを継続してきた訪問看護師の存在は今後ますます重要となる。訪問看護師のセカンドステージに至るプロセス、職業人生を生きる意味、ケアの実践知と活用について、明らかにされた研究は見られない。在宅看取りへのキャリア移行、継続要因について明らかとなり、在宅看取りの実践の継続を支える環境整備や訪問看護師の多様な働き方改革が明確になるという意義がある。

研究成果の概要（英文）：Seven home-visiting nurses in their 60s or older who have been providing end-of-life care for many years were asked to share their experiences about how they became involved in end-of-life care at home and their practice and care.

First, in order to clarify how home-visiting nurses in the second stage practice and continue end-of-life care at home, their reasons for continuing, the care they provide, and what supports their continuation, the narratives will be analyzed qualitatively and phenomenologically, thus revealing the structure of the real experiences of each visiting nurse. Currently, the research results have not yet been reported at academic conferences or published in academic articles. They will be reported and presented on future occasions.

研究分野：基礎看護学

キーワード：セカンドステージにある訪問看護師 在宅看取りの実践の語り 継続している要因 ケアの実践知

研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

2019年研究の最初の計画では、看護職のセカンドステージへの移行を支援する教育内容や教育方法には何が必要か、在宅看取りのできる訪問看護師を増やすための環境整備や教育には何がどのように必要で、かつ有効かを明らかにすることであった。2020年に定年退職となり新たな職場に移動したが、2020年のコロナ感染症の第一波で講義、演習、実習ができずその対応のために研究がまったくできなかった。同時に2021年度に予定されていた4大開設の認可が認められず、閉校し受け入れ停止を予定していた短期大学学生の入学受け入れへと方針変更となり、研究環境の確保はさらに困難となった。度重なるコロナ感染対応に追われるとともに教員体制も退職者や、急な専門領域の変更による混乱が生じ2021年度未までの2年間は研究時間の確保ができなかった。2022年は体調不良のため客員研究員となり通院治療を受けながら療養生活を続ける状況となり、研究が大幅に遅れた。

2. 研究の目的

セカンドステージにおいて訪問看護師が在宅看取りを続けている理由や意味、ケアの実践についてインタビューにより語られたデータから訪問看護師の経験の構造を明らかにし、実践の背景とともに実践のリアリティや個別性が掘り起こされ真実が明らかになっていく。在宅看取りを担う訪問看護師の教育研修に活かすことにより、在宅看取りの質の高い実践者の育成や実践者を増やすことへとつなげることができる。利用する当事者・家族の個別な事情や最後の希望に添えるよう環境を整備することができる。人生の終末を生きる当事者・家族の不安や苦痛、苦難を和らげることにつなげることができ、在宅看取りを人生の終末期のみに限定せず、人の一生の理解や個性に焦点を当て考える視点を提供したい。死を忌み嫌うことなく平和や死について考えるように固定観念にとらわれず、ケアしケアされる人の一生について考え死生観の重要性についてメッセージを伝えたい。

3. 研究の方法

本研究に適したリアリティの高い結果を導き出すための分析方法を修得するために、マイノリティの人々の体験、当事者研究や、文化人類学、哲学と質的研究についての文献や研究手法について基本から学ぶこととした。その中で個々の個別な実践のリアリティの中にある真実を明らかにする分析方法が本研究の分析方法としてふさわしいと考えるようになった。従来の質的記述的分析では個々の実践のスタイルやリアリティ、真実は見いだせずインパクトが乏しいと考えたからである。また、ナラティブと語りの分析にあたっては哲学や現象学の学問的知識とともに、精神分析に関する知識も必要であることがわかった。研究者自身の過去の体験や幼少期からの記憶や潜在意識なども言語化し記述し、現象をありのままに見つめ問い直していく日々の姿勢や構え、態度について要求されるため、基本文献を読み理解に時間を要することになった。

哲学と質的現象学的分析により、セカンドステージにある訪問看護師が在宅看取りを継続している理由や、意味、一人一人の実践の背景、実践のプロセス、実践の型、ケアの実践知について、訪問看

看護師の語りから、経験の構造を内側からデテールにこだわり、丁寧に掘り起こしていく質的現象学的分析により明らかにしていくことで、一人一人の実践の個別性や、リアリティが浮き彫りになり、真実が浮かび上がる。それらが明らかになれば、おのずとセカンドステージへの移行や、キャリア発達支援のためどのような方策が必要かについてメッセージ性の高いインパクトのある新たな知見が見いだされると考えた。

現在現象学的質的分析方法について具体的に指導を受けながら、一人一人の訪問看護師の語りをありのままの言葉を用いて、経験を構造化し章立てしながら分析を進めている。体調に波があり療養生活をしながらであるため時間を要し、学会報告や論文発表には至れていないことを強く反省する。今後学会報告、学術論文として完成させていく。

4, 研究成果

以下にこれまでのインタビューで研究協力者より得られた実践の語りから、来歴や実践の特徴の一部について報告する。

訪問看護師 A さん 70 代前半

来歴：看護師資格取得後 1 年間病院の op 室勤務。その後 ICU・救急に一年間勤務後退職し、保健師学校に進学し保健師資格を取得する。仕事を続けることを条件に結婚し、4 年間子育てに専念したのち、保健師資格で総合病院に就職し、訪問看護部門で勤務する。20 代後半に在宅看取り専門の訪問看護ステーションを友人と 2 人で立ち上げ、管理者として定年まで勤務。退職後市からの強い要請を受け、地域包括支援センターで勤務したが、体調を崩し 4 年で退職。療養により体調回復し、元職場の訪問看護ステーションで非常勤勤務をしている。

訪問看護師 B さん 60 代前半

来歴：姉が看護師で自分も看護師になりたかったが、家族の勧めで栄養士の道に進む。結婚し 2 児に恵まれたが夫のギャンブルで離婚、その後病院の看護部長室で事務職員として勤務する。看護部長の勧めもあり 34 歳から看護学校に進学し勤務しながら 5 年で看護師資格を取得し、39 歳で病院に看護師として就職する。整形外科、小児科、緩和ケア病棟で勤務。医師や、看護部長が変わり、経営方針ややり方が変わり、それまで行っていた患者家族の喜ぶ充実したケアができなくなり退職した。退職後現在の訪問看護ステーションに就職し在宅看取りを行っている。緩和ケア病棟勤務中に様々な研修に参加し学んだケアを実践に活かしている。

訪問看護師 C さん 60 代後半

来歴：4 人兄弟で高校卒業後就職するつもりだったが、たまたま知り合いから大阪西成にある病院が募集していると就職を進められ、すぐに就職が決まり荷物を送った。看護師資格取得後看護師として 5 年間病院勤務。結婚退職し地元に戻ったが、仕事を続けたいと思い地元で就職。病棟、外来、地域連携室などで経験を積みケアマネージャー資格も取得、看護師師長も経験。59 歳で病院を退職し 60

歳から訪問看護ステーションで嘱託常勤として勤務。

訪問看護師 H さん 60 代前半

来歴：働きながら看護師免許を取得し正看になってからもやめている期間がなかった。27 歳の時第 1 子を出産、第 2 子も産休期間産前産後 8 週休んだのみ。退職した 1 施設だけ 3 か月休んだが、18 歳から 65 歳までずっと仕事を続けてきた。最初は個人病院の整形外科で働きながら学生し勉強した。緩和ケアがしたかったため、独立型の緩和ケア病院で勤務した。研修にもたくさん参加させてもらった。訪問看護ステーションには 10 年ほど前ぐらいに移った。

訪問看護師 F さん 60 代前半

来歴：北海道出身、高卒で働くのが普通だったため商業高校卒業後保険会社 OL として勤務したが結婚で退職。27 歳で離婚し叔父が関西にいたため叔父の仕事の事務手伝いで関西に移住した。手に職をつけたいとの思いで看護助手として民間病院に勤務、看護師目指して受験勉強を始め予備校に通い医師会の准看課程に進学。卒業後 2 年課程に進学し奨学金をうけ看護師資格を取得。40 歳から市内の民間病院で勤務。整形外科、小児科を除く他科混合病棟に 3 年間勤務。過労で体重が 10 kg 減少し訪問看護ステーションに移動し 15 年間勤務し在宅看取りの実践をした。55 歳で家族が入院治療、看取りに近い状態となり介護のため退職。55 歳、現職場の法人より訪問看護ステーション立ち上げるため管理者として着任して欲しいとの要請を受け着任した。

現行での 90 分の時間内での訪問看護サービスでは賅えない現実に直面した経験から、利用者の実費負担による訪問看護サービスを整備し、希望者に提供し希望を叶えることができた。

訪問看護師 E さん 60 代後半

来歴：看護師資格取得後県立病院で 12 年間勤務後看護学校に移動し、10 年間看護教員として勤務し在宅看護論を担当した。その後行政の医務課に移動となった。2000 年に介護保険がスタートし、グループホームなどの実地指導に携わったが身体拘束に疑問を感じ行政を早期退職。その後県看護協会で勤務し宮崎和加子氏に出会い影響を受ける。グループホームの見学や米国の施設を視察し、自分が追い求めていたケアができると考え 64 歳から看護小規模多機能施設の立ち上げを目指し行政への申請手続きに取り組んだ。県内初の事業で通所サービス、リハビリ、宿泊を合わせ訪問看護ステーションと併設し、医療依存度の高い利用者にも対応できる、地域密着型の医療・介護サービスを提供できる施設の経営責任者と現場責任者を兼務している。

訪問看護師 G さん 70 代前半

来歴：看護師資格取得後子育てしながら保健所の訪問指導員として、30 歳ごろより 45 歳ごろまで約 15 年間、一日 5 時間ほどの非常勤勤務をした。45 歳から訪問看護ステーション制度ができ、保健所の訪問指導員の仕事が民間委託になったため、常勤の仕事に就いたが 8 時間勤務で残業もある仕事、法人の方針に従うことも性に合わず、54 歳で訪問看護ステーションを自分の会社として立ち上げ社

長として管理責任者を務める。秋山正子氏と旧知の仲。転居も転職もせず同じ地域でこれまで 1500 件の在宅看取りにかかわってきた。少学 2 年性の時に近所の子供が亡くなり、そのことが強い動機となり、以来死について強い関心を持ち続け在宅看取りを続けている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吾妻 知美 (Azuma Tomomi) (90295387)	京都府立医科大学・医学部・教授 (24303)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関